

## 令和 2 年度 千葉大学国際教養学部 学位記伝達式式辞

令和 3 年 (2021 年) 3 月 23 日

本日ここに学士 (国際教養学) の学位を取得し、卒業を迎えられた皆さんに、国際教養学部の教職員を代表して心よりお祝いのことばを申し上げます。また、皆さんの成長を見守り、応援してこられたご家族や関係者の皆様にも深甚なる敬意を表します。2019 年末から流行した新型コロナウイルス感染症の影響で、卒業式は簡素化され、それとともにご家族や関係者の皆様にご列席いただく機会を得られなかったことは誠に残念であります。しかし、昨年とは異なり、卒業式と学位記伝達式の双方を曲がりなりに実施することができたことは喜ばしいことです。これを可能にいただいた関係各位のご努力に、心から御礼を申し上げます。

さて、本日の学位記伝達式にあたって、皆さんに一言はなむけの言葉を贈らせていただきます。

皆さんが履修した「史資料分析 I」という授業の中で、私は「世界は不均等である」ということを申し上げました。皆さんは覚えているでしょうか。GDP も人口も、飢餓も難民も世界で不均等に分かち持たれているということです。今般の COVID-19 についても、その不均等性を考える必要があります。そもそも、新興感染症に限定してみても、人類は、1970 年代からの 50 年間、エボラウイルス、HIV/AIDS、MERS、SARS、鳥インフルエンザなどを経験してきました。しかし、それらが世界的な問題であると認識されてこなかったのは、こうした感染症の流行がおおむね南の世界 (グローバルサウス) に限定されていたからです。これに対して COVID-19 は、日本を含む先進資本主義国を中心に、急速に経済発展を進める BRICS の諸国に拡大したために、はじめて私たちも大問題であると認識するようになったというわけです。つまり、新興感染症も、また、一度は封じ込めたと考えていた結核・コレラ・マラリアなどの再興感染症の流行についても、私たちは自分たちの問題であると認識してこなかったということです。

このような認識上の欠落はなぜ生じるのでしょうか。私の先生の先生にあたる歴史学と国際関係論の研究者に江口朴郎 (1911-1989) という方がおられました。私は江口さんの孫弟子ということになります。この方の発言は、つねに哲学的な響きをもっていました。しばしば「江口節」と呼ばれた江口さんの発言を短く三つだけ紹介いたします。

1. 豊かなものが天国へ行くのは、ラクダが針の穴を通るより難しい。
2. 一方に先進的なものがあると、より遅れたものは同じ道を歩めない。
3. こっちが引っ込めば、あっちが膨らむ。

第一の観点は、新約聖書のマタイによる福音書 (19 章 24 節) の表現をとったものです。江口さんは、これを、先進資本主義国の人間こそ認識に限界があり、間違いやすく、逆に世界の矛盾が集中している地域の人びとの主張こそ、より間違いが少ない、という意味で使っています。

第二の観点は、ウォーラーステインという社会学者の主張として有名になった世界システム論の観点を先取りしていたもので、「遅れている」のではなく「遅らされている」、「後進的」であるのは内部に問題があるのではなく、「先進的」なものが存在するためである、という世界の関係性を示したものです。

第三の観点は、「ゴム風船」の論理とも言われるもので、世界は相互に関係しているため、ある地域に矛盾が生じると、その矛盾や緊張関係の影響は別の地域に出現するというものです。

このように考えてみれば、いま世界で生じているさまざまな問題、国際教養学部ではこれをグローバル・イシューと名付けていますが、に目を向け、その解決に取り組む道筋を考えることができるのではないのでしょうか。現在の COVID-19 から生じる諸問題にも、またポストコロナの時代にも、江口さんの発言を是非思い起こして下さい (現在、新刊で入手できる著作として、江口朴郎『新版 帝国主義と民族』東京大学出版会、2013 があります)。

いまひとつこの機会に紹介したい、ものの見方があります。私たちは世界を比較するときに、しばしば、自分の住むこの日本という地域と世界のある地域を1対1で比較しがちです。これに対して、文化人類学者の川田順造さん(1934-)は文化の三角測量が必要だと言います(『文化の三角測量-川田順造講演集』人文書院、2008)。川田さんは、口頭伝承をつかって無文字社会の歴史を探究する人類学者で、研究対象である西アフリカの旧モシ王国の社会、大学院生の時に研究活動を展開したフランス(パリ)、そして生活している日本という三点を基準として世界を理解しようとしています。

もちろん、この三角測量には色々な意味があります。

第一に、この三角測量は、必ずしも三つの社会それぞれを分析することが目的なのではありません。むしろ、異なる三つの視点を持ち、そこから世界で生じているさまざまな問題を索出・発見するために使われるということです。発見的手法、ヒューリスティック *heuristic* ということです。

第二に、この三点はできるだけ異なる性質をもつ方が問題の索出に役立つと思われませんが、皆さんはそれと気付いているか否かにかかわらず、すでに二つや三つの基準を持っているのではないでしょうか。それを自覚的に三点に拡大し、三角測量に活用するようにすれば良いのです。

ここで江口さんと川田さんの考え方を紹介したのは、これから皆さんが社会においてさまざまな活動を展開する中で、壁にぶつかっている自分というのものをつねに相対的に見る眼を養うとともに、そのような相対性・関係性・連関や比較の視点を自在に操ることのできる主体を皆さん自身で確立して行ってほしいと考えるからです。つねに「全体を見る眼」が必要だということです。

国際教養学部において、皆さんが学んだのは、ただ知識を増やし、あらかじめ答えの分かっている問題を解決することではなかったはずですが、むしろ、答えの容易に見つからない問題、あるいは答えのない問題に取り組む方法を身につけたはずですが、知識はすぐに古くなるものです。しかし、ものを考え、理解する方法は簡単に古びることはありません。むしろ、皆さんのこれからの経験が、この学部で学んだ方法をさらに豊かなものにしていくと確信しています。混沌とした時代、危機の時代だからこそ、次のことばを贈ります。ポーランド出身でフランスで活躍した物理学者・化学者マリ・キュリーのことばです。「人生の中で恐れるものなど何もありません。理解されるべきものがあるだけです。いまやさらに理解を深めるときです。そうすれば私たちの恐れはより小さなものになるでしょう。」(Nothing in life is to be feared, it is only to be understood. Now is the time to understand more, so that we may fear less; Rien dans la vie n'est à craindre, tout doit être compris. C'est maintenant le moment de comprendre davantage, afin de craindre moins.)

国際教養学部でこれまで皆さんの学びを支えてきてくれた、諸先生方、職員の方々、先輩、同輩、後輩の学生諸君の相互のつながりは、今後も途絶えることはありません。社会において悩んだ時、意見を聞いてみたいと思った時には是非本学部に問い合わせてください。その時、たとえ先生方や職員の皆さんの世代が代わっていても、その時代の教職員がつねに皆さんを支えてくれるはずですが。

以上をもちまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。これからの皆さんのご活躍を期待しています。

千葉大学国際教養学部長  
小澤 弘明